

変わり行く地域ネットワークの役割

多摩美術大学 石田 晴久

私はかつてはTRAINの関係者のひとりだったが、1997年3月に東大大型センターを定年退職してからは、TRAINとは縁が切れてしまった。そのTRAINがISP（インターネット・サービス・プロバイダー）の性格をもたなくなると聞いて、インターネット時代の急速な変化を改めて実感している。

東大を辞した後、私は多摩美術大学で教えるかたわら（株）アスキーの役員にもなったが、そのときTRAINの経験を買われたのか、（株）アスキーネットという草分けのISP会社の取締役会長になるよう頼まれた。この仕事を通して分かったのは、ISPをビジネスとしてやるのは、非常に大変だということである。それだけに、TRAINの運用もかなり大変だったに違いないと、TRAIN関係者のご苦労もしのばれたものである。

さて、当時アスキーネットでは、通常の有料サービスと、コマーシャルを画面に表示することで、接続料金を全く無料にするサービスの2本立てをやっていた。ところが97年夏からは、無料サービスのパートナーであるハイパーネットワーク社からの入金途絶えてしまった。同社は、スポンサー会社から広告料を取って、その一部をアスキーネットに回していたのである。広告が集められなくなったハイパーネットワーク社はその年末に倒産した。あとに、同社のI社長は「社長失格」という本を出している。このスキームは今なら成功しそうだが、当時はまだ3年ほど早すぎたのであろう。

この倒産の余波で、アスキーネットでは、無料サービスは打ち切らざるをえなくなった。問題は有料サービス、すなわちISP事業そのものをどうするかである。これには、私も（株）アスキーの社長だった西和彦氏も迷ったが、下記のような理由で、思い切ってISPを止めることにした。

- (1) ISP事業は設備産業である。ユーザーが増えると、回線やルーターを増強するのにお金がかかる。
- (2) ユーザーのマルチメディア指向のため、ユーザー数に比例する以上に回線容量を上げなければならず、これもコスト増となる。
- (3) ハッカー対策や倫理問題解決のために、弁護士費用など余計な金がかかる。
- (4) それでいて、過当競争のため、ユーザーへの課金は安くしないといけない。
- (5) NTTやKDDのように、自前で回線をもつ大手の通信キャリアが、本格的にISP事業に参入してきた。キャリアから回線を借りていたのでは、なかなか勝負にならない。

(6) ISP事業は、軌道に乗り出すと、技術的にはあまり面白みがない。

こうして、アスキーネットは98年末に解散させた。つまりツブしたのである。これは、TRAINがISPを止めたのと一脈通じるところがある。

ISPサービスを止めたことについては、ユーザーからは当然クレームがきた。一番キツかったのは、名刺などに刷ったメールアドレスが使えなくなるという文句である。これには謝るしかなかったが、現代は電話番号だって変わる時代であり、メールアドレスが永遠だということにはならない。昔、日本初のプロバイダを目指したIIJが郵政省に認可を求めたとき、「倒産の危険性があるベンチャー企業が通信事業をやるなんて、もってのほか」と言われて認可を1年以上待たされたことがあったが、郵政省の言い分にも一理はあったのかもしれないという気がした。

またクレームの中には、「上記(6)の理由でやめるのは、ケシカラン。ビジネスは面白さとは関係なくやれ」というお叱りもあった。学者がビジネスをやる時、この辺は注意がいる。

一方、上記(5)の理由は、多摩美大(八王子市内にある)でも考えた。TRAINに入るか、学術情報センターのSINETに入るか、民間のISPに加入するか、の選択があったが、当事者の希望で、結局、多摩美大はNTTのOCNサービスに加入した。ISP事業はもはや通信キャリアに向けたビジネスになったという判断である。

いま考えてみると、ISPとしてのTRAINや他の地域ネットワークは、大学などの教育機関にインターネットを普及させる上で大きな役割を果たした。しかし、すでに述べたように、今やISPは民間企業、とくに回線をもつキャリアにまかせていい時代である。

またインターネットは大学などの職場でなくても、家庭からでも使えるようになった。しかも、電話やISDNだけではなく、CATV、ADSL、WLLなど高速で定額の回線も使えるようになりつつある。携帯電話や専用線の使用料も安くなってきた。将来は、職場よりも家庭からのインターネット・アクセスの方が速くなる可能性すらある。とにかく、すごい変化である。

さて、そうなると地域ネットワークはもういらぬかということ、決してそうではない。CSI(中国四国インターネット協議会)やKiU(柏インターネットユニオン)などの例が示すように、地域ネットワークが非営利の形で運営できれば、インターネットの普及を図って欲しい場所はいくらでもあり、情報交換や人的交流の場の提供も重要である。

商用ベースのISPを中心とするインターネットは、いまや金儲けの場と化した。一攫千金を夢見るベンチャーであふれているから、採算のとれない場所にはインターネットはもはや届かない。そこにインターネットのサービスが届けられるのは非営利の地域ネットワークだけである。アスキーネットのような営利ISPは死んだが、TRAINのような非営利地域ネットワーク組織には、長生きして、活発な活動を続けてもらいたいものである。